田畑の草種

茅・茅萱・千茅・血茅（チガヤ）

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地　須藤　健一

イネ科チガヤ属の多年生草本。日本では1属1種が自生する。地下茎が横に這い所々から葉を出し30cm～50cmの高さの群落をつくる。初夏に葉よりも高い穂を出す。真っ白な綿毛に包まれた穂が風に靡く田の畦。田んぼが始まるのはもう少し先になるが，日本の初夏の風物詩でもある。

日本ではごく普通の草本であり，万葉人の目にも留まっていた。万葉の時代，大阪湾を「ちぬ（茅渟とも血沼とも）の海」と呼んだ。その謂れには諸説あるようだが，神武天皇の皇兄が戦傷を受け，その血が流れ着いたからという故事に因むとされる。その「ち」に「茅」が当てられたのは，当時の大阪湾の沿岸は，一面に「茅」が生い茂る草原であったのではないかと想像する。都は生駒山系を越えた奈良盆地にあったし，当時の大阪平野から奈良まで，茫漠とした茅草原であったのかもしれない。万葉人はこの「茅」に様々な思いを重ねた。

万葉集に「茅」を読み込んだ歌が26種。その中には「茅」を「茅花」として詠った歌が3首で，残りは「浅茅」や「浅茅原」として詠われる。大伴旅人は，

「浅茅原　つばらつばらに　物念へば
　故りにし郷し　念ほゆるかも」（巻3）

と，赴任先の大宰府で浅茅の生い茂る野を見ながら感傷に浸り，かつて過ごした奈良や明日香の都をしみじみと思い出す。因みに，この歌に因んだ「つばらつばら」という焼き菓子が，大宰府でもなく奈良でもなく，京都にある。

また，こんな歌も。

「君に似る　草と見しより　我が標めし
　野山の浅茅　人な刈りそね」（巻7　読み人知らず）

あの人に似る草と知ってから私が野山の浅茅に標をつけたのです。誰もその浅茅を刈ってはいけませんよ（彼に手を出さないでよ）という自己主張。

元来，「浅茅」とは「まばらに生えた，または丈の低いチガヤ」をいい，万葉集の「浅茅」も「浅茅原」も，一面に広がった茅の草原で標をつけて，愛しい人や家族のことを思ったりする縁として詠われるが，平安期に入ると趣が変わってくる。

土佐日記にこんな歌がある。

「浅茅生の　野辺にしあれば　水もなき
　池に摘みつる　若菜なりけり」

正月七日に魚などが届いた。その中に歌とともに若菜が入っていた。私どもの家は，茅が生い茂る野にあり，地名は池ながら，水もない池で摘んだ若菜なのです，と，茅草原に対する思いに変化が見られる。

この変化を決定付けたのが源氏物語。その第15帖「蓬生」。一時は源氏の君の寵愛を受けたものの，源氏が都を追われ，後見を失った末摘花が暮らす邸は，叔母や侍従たちが去ってしまい，庭を手入れするものもいなくなった。この，「茅」の生える庭を放っておくと，「かかるままに，浅茅は庭の面も見えず，しげき蓬は軒を争ひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉ぢこめたる」庭になる。この末摘花の暮らす屋敷の庭は，源氏の遷都で再び手入れがなされるが，手入れされずにさらに放っておくと「浅茅が宿」（雨月物語）となり，主をなくした荒れ放題の家の代名詞になる。

それ以上放っておくと・・，心配することなかれ，ススキが入り，背丈で負けるチガヤはやがて消え去り，ススキ草原やササ群落を経て松林へと遷移していく。

チガヤには「荒涼とした」風景が似合うのかもしれないが，決して放ったらかしではその維持はできないのである。

私事で恐縮だが，私の高校時代にこんな戯れ歌があった。

「三国ヶ丘を座布団に　金剛山脈枕にし
　ちぬの海の風につく　あれは名門わが母校」

チガヤを英名で「Japanese blood grass」という。関西では秋にチガヤの葉は赤く紅葉する。万葉の時代の大阪湾沿岸には，「ちぬの海」のいわれにふさわしい血の色が広がっていたのかもしれない。そして，青年の胸にも熱い血潮が漲っていたのかもしれない。